

耳鼻咽喉科

Department of Otolaryngology,
Head and Neck Surgery



耳鼻咽喉科長
伊藤 壽一



機能温存・再生をめざした 頭頸部機能外科

頭頸部が担う機能の温存、再生を主軸に据え、特に下記のような医療に力を入れている。①人工内耳手術：近年では乳幼児の高度感音難聴症例の診療・手術に力を入れている。②内視鏡下鼻頭蓋底手術：難治性副鼻腔炎や頭蓋底腫瘍に内視鏡を用いた手術を施行している。③音声外科 甲状軟骨形成術：声帯麻痺に対してゴアテックスを挿入片とした甲状軟骨形成術を行っている。④甲状腺手術：術前声帯麻痺のない甲状腺がん反回神経癒着症例で反回神経を極力温存し、8割で永続的声帯麻痺を回避できている。⑤頭頸部がんの機能温存手術・チーム医療：放射線科、形成外科や言語聴覚士と協力して、術後の音声・嚥下機能の温存・回復を図っている。

代表的診療対象疾患

両側高度感音難聴、聴神経腫瘍、メニエール病、顔面神経麻痺、慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎、耳硬化症、慢性副鼻腔炎、嗅神経芽細胞腫、アレルギー性鼻炎、反回神経麻痺、甲状腺腫瘍、喉頭がん、咽頭がん、副鼻腔がん、口腔がん、唾液腺腫瘍

診療体制と治療実績

外来診療体制と実績

2012年度の外来患者数は延べ27,481人(うち初診3,138人)であった。専門外来は、咽頭、中耳炎・側頭骨外科、人工内耳、難聴、小児難聴、遺伝難聴、鼻・副鼻腔、音声、腫瘍・甲状腺、めまいの各領域に分かれ、専門性の高い医療を提供している。また、Day Surgery Unitを利用した日帰りあるいは短期入院手術を行い(2012年度は283例)、患者さんの負担軽減を図っている。

入院診療体制と実績

2012年度の入院患者数は736例で、そのうち中央手術室を利用する手術症例は421例であった。手術症例(長時間手術や綿密な術後管理を要する症例)、頭頸部がんに対する放射線治療・抗がん剤治療症例や強い急性炎症例、末梢性めまい、突発性難聴、顔面神経麻痺などが入院の対象である。病床数は45床、病床稼働率は平均88.9%、在院日数は平均18.59日であった。主な治療の実績は表の通り。

①主な入院治療と件数		②主な Day surgery unit 利用手術と件数	
人工内耳埋め込み術	31	鼓膜・鼓室形成術	5
聴神経腫瘍摘出術	2	内視鏡下鼻副鼻腔手術	35
鼓室形成術	59	声帯ポリープ・腫瘍切除	56
内視鏡下鼻副鼻腔手術	64	頸部腫瘍切除術	37
甲状腺手術(がんを含む)	99	甲状軟骨形成術	12
喉頭がん(手術または放射線)	9	甲状腺手術	16
下咽頭がん(手術または放射線)	19		
中咽頭がん(手術または放射線)	18		
上顎がん(集学的治療)	4		
口腔がん(手術または放射線)	43		
唾液腺がん(手術、放射線併用)	5		

臨床研究の取り組み

世界初、成長因子を用いた内耳疾患治療

臨床研究として当科が主導して急性高度難聴症例に対する生体吸収性徐放ゲルを用いたリコンビナント・ヒト・インスリン様細胞成長因子1内耳投与による感音難聴治療の検討(第I-II相臨床試験)を2012年から継続して行った。2012年度は本研究に当院から19症例が登録された。本研究は当科で行われた基礎研究データを用いた、世界初の成長因

子を用いた内耳疾患治療の臨床研究である。当科の他に全国8病院(弘前大学病院、筑波大学病院、虎の門病院、信州大学病院、名古屋市立大学病院、神戸市立医療センター中央市民病院、愛媛大学病院、九州大学病院)の耳鼻咽喉科の協力のもと行われていたが、2012年度末に目標症例数120例に達した。